

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nicholsピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会 | Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

<本号は「熊に対する正しい人の対処法について」>

私が知床で熊を共同研究している動物学者の稗田俊一さんとの共通した見解を皆さんにお知らせする。

北海道道東の知床半島部に熊が常時出没する地帯があり、そこで10数人の漁師が番屋(漁場の拠点住家)に常在し、熊が徘徊している地所で、午前3時頃から熊と大きなトラブルも無く、外仕事をし、理想的な状況で共存している事例である。

この場所は札幌から車道を 447km 程行った知床半島の北側の海岸で、ポンベツ川・ルシャ川・テッパンベツ川と言う 8月下旬から 11月上旬にかけて、多くの鱒や鮭が産卵に遡上する地所。この三河川の河口部付近を含む東西全長約 3km の標高 20m 以下の海岸一帯は、高木が無く草丈 1,3m 以下の草地で(山側は斜度 20~40 度の下草ある樹林地)、その東端に当該番屋がある。その番屋は「19号番屋」と言い、1964年(昭和39年)4月に、建設され、漁獲操業を始めた。当時は十条製紙の事務所がテッパンベツ川の海岸部にあり、三河川奥での伐木をワイヤーで海岸部に牽引し、自動車で搬出していた。当時も熊が出没、危険と判断した熊は、猟師を呼び銃殺させていた。ここで熊を最後に銃殺したのは、漁場開始年から 25年後の 1989年 8月 26日に、ルシャ川河口で、推定 15歳の雄 1頭(体重 232kg、体長 1.74m)を獲ったのが最後である。以来、19号番屋の社長「大瀬初三郎さん、1936年生」は、番屋開始以前から、この地所での山林見回りの経験から、「熊は智者で、人の言葉を理解出来る」との考えに至り、その信念で、熊の銃殺を止めた。当時は、熊は人を恐れ(銃殺されるとの危惧から)人を見ると逃げた。その後、銃殺を止めて 6年後から(1995年頃から)、人や車を熊があまり気にせず、番屋付近にまで、日中も熊が人を気にせず出て来るようになり、現在に至っている。現在では 6月~11月の間、数時間居れば数頭の熊が見られる。

<熊が最も嫌うのは人から行動を強烈に邪魔される事だが、この地所では、それが無い>

ここには熊の食物がある(鱒・鮭、蟻、トコビ、海藻、海棲獣の死体、草類、樹の実・葉、鹿など)。標高 20m以下の地所は丈の低い草地で熊にとって、見透しが利き熊同士の遭遇が回避し得る。従って、主に、母熊が子を育てる場・子を教育する場として使われ。また母から自立した若熊の採餌地として使われている。単独個体が餌(主として鮭・鱒)獲りにくるが、母子が居ると、母子を優先して、まもなくその場から、去り、姿を消す(暗黙の了解になっている)。単独個体が去らない場合は、母熊が単独熊に数分近くまで近づき、両者が無言で顔を見やると、しばらくして、単独熊は去って行く(熊世界の掟であろう)。側斜面は移動路、休憩地(高地から見下ろし、眺望が効く)、草類樹の実の採餌場として使われている。道路は移動路として、徘徊等に、路面の窪地の水たまりでの水飲み、排糞地(止まって排糞する場合と歩きながら排糞する場合とがる)として、また子熊の遊び場として利用されている。道路脇の林地(19号番屋の手前の林地やポンベツ沢出合い付近の林地)は熊が休息地として、利用している場合がある。ここには、他に鹿・狐・リス類・鼠類・尖鼠類・ねずみ類・鶺鴒・ツル鷹類・他野鳥が居る。

<大瀬初三郎さんの熊対策の実際>

基本は共存である。人が利用する場所(番屋付近と道路を通る場合はその場の道路)から熊を言葉で話し排除する事が基本。この場所は熊が使う場所でない事を、話し聞かせ、時には、大声で諭すか、怒鳴り叱りつける。言う言葉も、その文言の意味が熊も理解し、継続的に覚えるように、同じ言葉を言う(時々で言う言葉が異なると、熊がその意味が分からず混乱する)。「ここはお前が居る場所ではない。出て行け」と言うと、熊はその場から離れる。その結果、熊ともトラブルも無く、以後全く、熊が居ることに関し、不便は感じていない。番屋にしつこく寄る(近づく)熊が居る場合は、一時的に電気柵を張り、トラブルを予防している。番屋の人間にも、外での作業で、以前熊を怖がる者がいたが、熊が居る状態の経験を踏むと、恐怖心が解消する。要は、人と熊が使う場所を区別する事、これを、熊に教える事が基本である。「熊に発信器や耳にタグを着けるのは、熊に人間を嫌な者との印象を与え良くないし、ゴム弾や花火弾で追い払うような事は、単に人間嫌いにさせるだけで、弾を撃つ人間が来た時のみ熊はその場から逃げるが、居なくなると、程なく出現し、望ましい(熊が人を恨む事無く)、人と熊の共存関係は作れ得ないとの、大瀬初三郎さんの持論は」日本に於ける人と熊(月輪熊と熊)の共存策を論ずる上で、参考にすべき実例卓見である。

<憂うべき熊類の殺戮>

本州でも北海道でも、熊が単に道路を横切ったとか、宅地付近に姿を見せたと言うだけで、危険視し、新聞は危険獣として煽り報道し、檻罠仕掛けて殺して居るが、これらの熊は殆どは無害な熊である。熊であれば、体長1.3m以下、足幅13cm以下の熊は人を襲った事例は皆無である。熊を見れば殺す現状は、改めるべきである。出来なければ、日本は文化國は言えない。熊は日本の自然の頂点(人間とは対極関係)であり、その生き様は人が鏡とせねばならぬ獣である。

(了)